

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 嶋田 弘之

本論文はインドネシアで実践されているイスラームにのっとった医療「預言者の医学」の最近の動きに焦点をあてた研究である。預言者の医学は『クルアーン』と『ハディース』に基づき、具体的には生薬、吸角法（瀉血）、それにルクヤという呪文の三つから成る。本論文は、宗教的療法と近代医学を二元的に捉えてきた先行研究の見方を修正し、医療観という包括的な見方の中に預言者の医学を位置づけることで、その独自性を明らかにした。全6章ならびに文献一覧からなる。

第1章で論文のテーマを提示し、第2章で先行研究を要約した後、第3章で神霊交渉型、天人統合型、身体還元型、神人分離型という四つの医療観を提出する。第一のものは病気の原因を神霊に求め、それとの交渉で治療を行うもの、第二のものは中国医学やギリシャの四体液説のような全体論的世界観に基づく病因論と治療法、第三のものは近代医療に代表される医療観である。それに対し、神人分離型は究極的な病気の原因は神にあるが、病気と治療のメカニズム自体は自然なものとするもので、他の医療観と併存し得る。預言者の医学はこの神人分離型医療観に基づく。続いて、第4章ではイスラームの教義と信仰を要約し、その中に預言者の医学の背景にあるイスラーム復興を位置づける。伝統的にスーフイズムの影響が強かったインドネシアでは、イスラーム復興はスーフイズムの神秘主義を排除しつつも、その信仰心や道徳の重視を保存する「道徳論的スーフイズム」という形態をとったことが指摘される。

第5章では、預言者の医学の具体的な事例が分析される。預言者の医療は西洋医学に対しては自らが自然に則り全人的であると主張する一方、ジャワの伝統的な治療者ドゥクンに対してはそれが科学に反し、人間としての分を越えて治療者に超自然的な能力を認めると非難するという、二方面的な戦略をとることが明らかにされる。第6章では、生薬、吸角法、ルクヤという技法は「狭義の預言者の医学」であり、その背後にはムスリムとしての生き方に関する理念が存在するのであって、この「広義の預言者の医学」が「狭義の預言者の医学」を支える構造になっていることが論じられる。

本論文は、インドネシアのイスラーム復興という現在進行形の動きの中に「預言者の医学」産業を位置づけ、その活動に従事する人々の内面的な論理を明らかにした。それは単純な宗教的原理主義の表れではなく、一方では全人的医療への志向、環境倫理的問題関心など、グローバルな動きにも呼応していることを示した意味は大きい。もとより事例としてはミクロな現象を扱っているため、それがマクロな動きとどうリンクするのか、位置づけが必ずしも徹底していない。また、内面的理解に重点を置いた分、十分に批判的な分析ができていないか、心許ない面もある。しかし、医療というイスラーム復興運動の研究では余り扱われず、かつ本邦では紹介されることが少ない題材を扱った点は高く評価できる。よって審査委員会は博士（文学）を授与するのに値するものと判定した。